

五仙の詩

多田 一郎

一丁の街は、酒店あり、玩具屋、小鳥屋、衣裳店、銀行、藥店、その他、店飾り美しく並ぶ。

百の窓、千の脚、暮の黄金の喧騒するありて香りたかきシガーをくわへて漫步する人あり、毛衣のコートに美装する夫人あり、

然り、この冬寒に獨り歩くはだしの子供あり、小箱を腰にぶら下げて、

五仙を求むる街の子供労働者よ。

靴みがきの子供よ。

靴みがきに街頭にさまよふ子供よ。

お前こそ、世に忘れられたる街の労働者。

阿呆の日記

働けど、働けど、なほ足らざる……と誰かが叫んだ。

靴下が破れ、襦衣がほころび、帽子を買ふ金のない生活を私は恥しいとは思はないが、明日の電燈代を苦面し、ガス代を思案して、三才の娘の病氣に醫者を迎へることの出来ぬのを情けなく思ふ。

私は毎日野菜屋に働き、更に食得ぬ生活をどうしやうぞ。

私は兩拳を虚空に合はせ、何を求め、なにを願ふか。

不安の路を歩くもの。

焦燥の路をさまよふもの。

冬空を仰ぐ私が、來春は、生活の疲れを、薄明の霜柱にも似る。

眞晝の朗かさを識らぬ、

大地にしつかりと、つけるには

平凡人

林田 盛雄

蛇は長すぎる。

むかでは足が多すぎる。

なべの中のドデヨウは一瞬考へる。

墓場には墓石が並んでゐる。

——誰が批評しやうと、自然はその心を變へないやうである。

鈴の振に人生の眞實を悟る人もあり。

五仙白銅を握つて客に心を碎く人もある。

——併し社會の鏡にうつる人間の姿は昔も今も批評によつて變りはしないやうである。

女が淫奔めるのもよいだらう。

人が富の前で祈り、權威や地位に宇頂天になるのもよいだらう。

戀愛の心から男女が飛び降りるのもよいだらう。

——で社會の頭髮を一系列に揃へられる道理は

うだ。

人は鼠の生活と違ふだらうか。

——身用をうたふさうだ。

穴から飛び出た、上ねすみ。

——雨やら、光りやら。

——しないで喰ふだけ食べて。

こは「をふやす。」と。

お前は私の父か？

林田盛雄

壁の聖母は微風を迎へ、
秋の窓は整列した寢言の數々を新しいシイツの香で彩る。

庭の花瓣に交響する小兒達の聲よ

お前達小兒院の小兒の姿を、私はあらためて社會人の胸でだきしめる。

宵の扉に閉ぢられる小兒達の心の上を、

小兒院の暗い長い廊下を、私は靜かに歩く父なき兒、母なき兒

父あり、母あり、なほその愛撫に染まぬ小兒達
私の心は人生の寂寥に掻き亂される。

薄暗い廊下を歩く私の側らにいつの間にかついて來た小兒、

私の腰を惹いて小聲でたづねる、

「お前は、私のパパか？」

「いや」私は右の子の顔を瞰下す
左側の子供が私を觀上げる

「それなら、お前は、ミーのパパか？」

私は、頭の蕊があつくなる。

右側の幼兒よ

左側の幼子よ

お前達の父で、私があつたなら

俺は、この薄暗い廊下を、

どうして、黙つて、獨りで歩かうぞ、

父よ、老ひたる父よ、

不孝なる子は、今ここを歩く。

風車と錢と……

林田盛雄

微風よ吹け。

野に明け、野に暮るゝ野の生活に
秋の風車に、秋の窓に、秋の眞實に。

こゝに一軒、あすこに一軒

自然は、自然の姿を偽りなく

今日もニハトリは胸を脹つて歩き廻る。

だが、秋の野の展望は朗かであらうか
眞實をいつはる者よ

人生をごまかす者よ

野の生活に人生の何があらう。

君のポケットが、今宵の食代で、煙草代で
ふくれてゐる時に

心の眞實を百姓の生活に發見するがよい。

微風は吹けど、風車は廻轉すれど
風車の許に錢は湧かず

鹽野の收穫に錢は生れず
盡きたる心の泉を誰がくみ上げる？

人生の曠野に秋の風車を展望する者よ。

君は、君のポケットの錢を愛するか

君のポケットの錢をドブに投げすてるか

君は、君にあらざるものゝ生活を愛するか
憶へ、併して憶へ

秋の野の心に生きる人生の眞實を。

（この古風な一篇を我が心の女に贈る）

ボンチもの百姓の歎き

多田 一朗

我が生命の糧。
人參よ！

お前はなぜ垂直に太地に根を伸ばしては呉れぬ
歪んで色艶が悪く、肉付きがなく。

俺の精一杯の努力を顧みもせず。

今は、お前を見向く誰もない。

永年の樂みをたゞき壞して、俺を今年もどん底生活
におとしてしまった。

ターナツプよ！

まるまる肥えて、色白く

俺はいつもお前にそう言つて聽かしたのに

不良少女みたいに太つ腹になつたり、こまちやくれ
たり

サンサンと降り注ぐ太陽に青々茂つて

あゝ、お前は俺を見限つた。

だから、鋤返して上の面に晒らしたのだ

世にすねる娘は誰も可愛がりはないのだ。

スピニチよ！

お前はボロギレより見苦しい。

貧乏人の古着だつて、お前程に虫に喰はれてぢぢれ
てゐない。

お前のそのお嫁人仕度は何といふ不恰好さだらう。

愛憎のつきる虚榮ぶり。

ピーツよ！

あばたで

血の氣がなく

お臀にイボイボがたくさんぶらさがつて

あゝ、お前も俺も世に浮び出る姿ぢやない

ラデイシユよ！

お前は眞實がない、心は蜂の巣だらけだ

そのくせ、全身、眞ッ赤な血の氣に染まつてゐる。

ボンチもの達よ！

お前等は、俺をさんぐなぶりものにする。

が、俺は百姓をやめはせぬ。(一九二五、十二)

化粧せる港

林田盛雄

見識らぬ人、見識る人。

秋は今日の人生を街の舗道に泳がしてゐる。

酒屋、藥屋、靴屋、寶石店

窓といふ窓がギヤソリンの臭をあびて

終日 俺の神經を溺死させやうと務める。

この化粧せる港に、

俺は人生のなぎを希はうか。

俺は間違つてお前の胸に漂着したんだ。

雲が見える、森がある。田園の生活よ。

動物がゐる、動物が。

彼方に、遙か遠くに、

そこそは、港を離れて、寝ころぶにふさはしい人生の曠野だ。

約束に酔ふ

林田香村

ヨチ、ヨチ幼子^{おなご}が歩き始め^{はじ}める。意識^{いしき}が酔^よ酔^よして訓練^{くんれん}に對^{たい}して薄明^{はくめい}になる。

して透明になる
教へる！手マネ、口マネ、足マネ『告知』に依る人間的
な約束を教へる。

な結束を發する
自己自衛のために糞便の前には、『ウー』と意志の表示を求める

示を求めた。だから幼子こどもは、糞便ふんぺんの！掛出かだち行爲こうゐに陶酔たうすいした後で『ウー』と約束よそわを傳達でんたする。

幼子こどもは約束やくそくに純粹じゆんすいである。

陶酔たうすいしてゐる間は幼子こうしは母を、約束やくそくを意識いしきしない。

自動車が衝突するのは、理智への約束に人の感情が酔ふからである。

覺書として

詩においては、**樞軸的**活動をその中途で切斷する意識の表現は不可能である。感覺は（今更ちよと多言を要せぬが）**純粋**である。

物体の運動、而して意志の傳達は、時間的にポヘジイの
心理主義派と稱する亞流の存在を否定する。さういふ
主張は愚の骨頂である。